

詩

【小学1年生・2年生】

特選

本のねどこ

城南小学校2年

國安

祐衣

としよかん
本がねむるばしよ
いろんな本が
ねむっている

たまにはおこされるけど
だいたいねてる
人がおきていても
本はねてる

ながあっても本はねている
じしんのときも
ひなんしているときも

本は人と
となりあわせて生きている
だから
本をやぶらないようにしましょう

詩

(評)

としよかんを「本のねどこ」と表わして詩にしてくれました。じっとしている本をねむっていると思ったユニークさがうれしいです。
本がおきたらいっしょに遊ぼうという思いも、本を大切にしたいという思いも伝わってきます。

(彦根文芸協会 西村 和野)



準特選

雨の音楽会

城東小学校2年

中田

亜沙美

雨がふったよ
雨がふったよ
かさにあたって
ぴち
ちよび
とん
どうろにあたって
ぴちや
ちやふ
とん
やねにあたって
ぴちよ
ちやび
とん
いろんな音があわさって
ぴち ちやふ とん
ぴち ちやふ とん
まるで まるで
雨の音楽会

(評)

雨がふったときの音がリズムをもって詩になっていて楽しいですね。絵本「おじさんのかさ」のお話を思い出しました。雨の音をよく聞いている作者はすごいなあと感じます。

(彦根文芸協会 西村 和野)

ぼくのおとうと

若葉小学校2年

杉本

圭那明

ぼくのおとうとは
うまれたばかりの
赤ちゃんです
いつ見ても
かわいいです
ねているときも
かわいいです
うんちをしても
かわいいです
なにしても
かわいいです
ぼくは
おとうとが大すきです



あいさつ

若葉小学校2年

村山

翔太

朝のあいさつ
元気に「おはよう」といったら
じぶんは
もつといいたいきもち
ひるのあいさつ
大きなこえで
「こんにちは」といったら
きいていた人に
「ありがとう」とゆわれて
いい気もち
よるのあいさつ
ゆうきをしばって
「こんばんは」といったら
「この子はえらいなー」とほめられて
もつといいなくなる



【小学3年生・4年生】

特 選

すいかの種

金城小学校 4年

山本

真央

すいかを食べた夏の昼 弟が
「すいかの種を植えようよ」
と言った
「いいよ」
私は答えた

近くの公園に行く
うれしそうに
公園の水道から水をくんで
こちらにかけよってくる弟
わたしは「すまない」と思った
私は知っている
すいかの種はこのまま植えても
芽が出ない事を
言った方がいいのかな…
スコップで土をほってうれしそうに
種をうめる弟に
「早く芽が出るといいね」
と土をなで 笑いながら言った

特 選

妹のにおい

城西小学校 3年

徳永

明李

妹は いいにおいがする
せっけんのにおい
ミルクのにおい
ベビーパウダーのにおい
妹はいいにおいがする
小さい 手から
かわいい かおから
ふわふわの かみの毛から
妹はいいにおいがする
大好きな妹
赤ちゃんの におい
妹はいいにおいがする

(評) 大好きな妹に鼻をくっつけて、びくびくと匂いをかいでいる作者のようすが、目の前に浮かんできます。「せっけん、ミルク、ベビーパウダー」「小さい手、かわいいかお、ふわふわのかみの毛」という言葉からも、作者の感じとる目、じっと見つめる暖かい気持ち伝わってくるほのぼのとした作品です。

(彦根文芸協会 谷口 明美)

笑顔でうなづく弟
私は思った
やっぱり本当の事は言えないや…
(評) おいしかったスイカの種をまきたいと、すぐさま行動する弟。まいても育たないと知りつつ、弟のいっしょうけんめいな思いを受け止め、戸惑いながらも暖かく見守り励めます姉である作者の胸の内が、むだな言葉なく表現されています。弟の願いをすっぱりと包み込むひろい愛情に、強く心を動かされます。
(彦根文芸協会 谷口 明美)

準特選

野球

城北小学校4年

松井 優大

ぼくは
 白いボールが飛んでくる時がすきだ
 ボールをクラブで
 「パシッ」とする音がいい
 だからボールが飛んでくると
 ぼくは ぜったい取るという気持ちがある
 取ったボールが
 とてもかくべつな一球になっていく
 ぼくは うれしい
 ぼくは
 ボールを取る時がすきだ

(評) 「白いボール」「パシッという音」「ぜったい取る」「かくべつな一球」などの短かくて選ばれた言葉使いが詩をリズムカルにひきしめています。作者の野球がすきだという気持ちが強くと伝わってきて、白球に立ち向かう真剣なまなざしまで見えてきます。

(彦根文芸協会 谷口 明美)

準特選

おばあちゃんの玉子やき

城東小学校3年

山田 亜美

わたしは 玉子やきが大好き
 アツアツでやわらかくて
 あまじよっぱい玉子やき
 でもママは作ってくれない
 「上手にできないよ」と言うんだもん
 それを知ってるおばあちゃん
 いつも玉子やきを作って出してくれる
 すっごくおいしい
 玉子やきを食べると元気になるよ
 なんだかうれしくなるよ
 いやなことわすれるよ
 すごいんだよ
 おばあちゃんの玉子やき
 おばあちゃんの玉子やき
 まほうみたい

(評) ママも作れない「おばあちゃんの玉子やき」のおいしさがあつたけのほめ言葉で表現されていて、その句いまで読み手に伝わってきます。作者の喜ぶ顔、ぱくぱくと頬ばるようす、それを見守るおばあちゃんの満足げな顔まで見えてきます。

(彦根文芸協会 谷口 明美)

佳作

なまけおぼけ

城北小学校4年

中川 陽裕

ぼくの へやの まんなかに
 なまけおぼけが 住んでいる
 ぼくが べんきょうしていると
 なまけおぼけの たかい声
 ちつとマンガをとつてくれ
 つぎマンガがみたいの
 ぼくもそれにさそわれて
 ぼくもマンガをとつてしまふ
 ぼくがそうじきかけてると
 なまけおぼけのたかい声
 なんだやつても同じだから
 やめなはれ
 なまけおぼけがいるかぎり
 なにをやつてもぼくはだめ
 なまけおぼけよ おねがいだ
 はやくどつかへいつてくれ

佳作

ひまわり

平田小学校 4年

有我

美恋

ひまわり
高いな
人より大きい

ひまわり
ゆれるな
風がふく

ひまわり
楽しいな
子どもたちに
見まもられ



佳作

あめんぼスケーター

城南小学校 3年

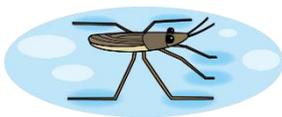
堀田

梨央

あめんぼ スイスイ
水の上を
ずっと

スケート
しているみたい
スイスイ
スイスイ

水をゆらして
わたしのことを
見てほしいって
言ってるよ



入選

ふしぎなおほり

亀山小学校 3年

織田

湖乃愛

おほりの中
白いはすの花
あめんぼ スイスイ

かもの 友だち三
なかよく ならんで
石がきにのぼって
草とりして
楽しそう

くさいにおい
なんのにおいかな
ジャージャー
なんの音かな
ジャボン
なにがとびこんだかな
ふしぎなおほり

スポーツの秋

城東小学校3年

田中 陽樹

サッカーをやってみたいな
 ボールをけってドリブルもしてみたいな
 やきゅうもしたいな
 バットでたまをうって
 ホームランうってみたいな
 ストライクにはなりたくないな
 ホームランうてるようにがんばりたいな
 たつきゅうもしてみたいな
 やってポンという音がきいてみたいな
 どれにしようかな



図書館見学

若葉小学校3年

権代 優紗

図書館見学に行った
 書こを見せてもらった
 三がいはぎつしや子供むけの本
 二かいは大人が読むような本
 三かいは手すりのすきまが広くて
 おちそうでこわかった
 それはふだん子供が近づかないからと
 分かった
 わたしは本がすきだから
 すぐに本を読みたくなった
 古いぎつしや新聞もたくさんあった
 百一才だから 古い本や古い新聞がたくさんあ
 ると分かった
 図書館のことがわかった
 次は本をかりに行きたい

もみじ

城西小学校4年

馬場 彩加

秋の空は海のように
 風がふくたび
 もみじやいちようが泳ぎだす
 色とりどりの秋の山にむかい
 風にのってきようそうだ

わたしの手に
 ひらひらもみじが落ちてきた
 わたしは そのもみじを手にして
 秋の山へと歩きだす



入選

ハロー 私はT u k u e

城北小学校 4年

細川 志真

ハロー私はT u k u e
 みんなとお勉強
 お話を見ている時が一番好き
 私のゆめは
 世界中のT u k u eになつて
 みんなのがんばるすがた見てみたいの
 一番の親友i s u
 ちゃんとしめてくれないと
 遊べないし それがずっと続くから
 しっかりしめてね
 私 席が大ー好き
 いろんなT u k u eとi s uに出合えるからね
 来年になったら またちがうご主人様が
 使ってくれるんだらうな
 いや もしかしたらちがう国にいつて
 ゆめがかなうかもしれない
 もしかしたらi s uがちがうかも…
 でも私達をきたなくする人はいやだな
 だけどそんな子いないよね
 私たちを大切にしてくれると
 いい事が起こるよ
 何かはひみつ
 あっ そろそろじゅ業が始まる
 私の名前おぼえてくれた？
 私の名前はT u k u e

【小学5年生・6年生】

特選

心のスイッチ

城西小学校 6年

鳥越 胡都音

あの木のように強くなりたい
 強い風がふいても
 倒れかけても
 つらくても
 心が折れない人になりたい
 あの川のようにおだやかになりたい
 いつでも笑顔で
 とてもやさしくて
 親切で
 思いやりのある人になりたい
 そんな人になれるだろうか
 いつかそんな人になりたい
 人は心のスイッチで気持ちが変わる
 だから心のスイッチを押さなければ
 ならない
 いつかあなたも心のスイッチを押して
 自分を変えられる時が来るでしょう



(評) 今の時代は、A I (人工知能) を使つての「時」
 の流れのように思われがちですが、作者は人の
 心の中に「スイッチ」を見つけ、素晴らしい自分
 のせかいを描きました。人として見失つてはい
 けないもの、それは強さ、やさしさや思いやりな
 どであることを心の奥の深い所で感じ、自己を
 みつめる素敵な作品となっています。

(彦根文芸協会 やまかみ まさよ)

秋風のハーモニ

城東小学校5年

北川 那奈

秋風ひゆるる
音ぷにのつて
ドレミの音をかなでるよ
きみは何の音をかなでるの？
ドの音 レの音 ミの音 なくに
わたしはドの音かなでるよ

秋風ひゆるる
音ぷといっしょ
みんなで仲良く遊んでる
きみは何の音が好き？
ファの音 ソの音 ラの音 どくれ
わたしはファの音が好きだよ

秋風ひゆるる
どこまでゆくのか？
たくさんの音をつないで
遠くまで行ってみよう！
ほら あそこに見えるコスモス畑で
コンサートを開こう!!

(評)

ことばのリズム感がとても良くて、どこまでも澄みきった世界が広がっていくのが、読み手にも心地よく伝わってきます。まさに「天真らん漫」を表わすような作品となりました。作者の心のうちは、きつと秋風ならではの感性にあふれていて、楽しい毎日が奏でられているのではないかと想像しました。

(彦根文芸協会 やまかみ まさよ)



佳作

私は一人じゃない

城北小学校6年

北川 結愛

私は一人じゃない
私達は仲間だ

同じ人間でも好ききらいがある

でもそんな特ちょうがあるからこそ 人間は生

きることができのさだろう

もし いじめられている人がいたら

やさしく声をかけてみよう

もし 苦しんでいる人がいるなら

やさしく手をさし出そう

そうしたら一人ぼっちがなくなる

こういう行動や取り組みで人間は生きられる

こういう助け合える仲間がいるからこそ人間は

生きられる

私は一人じゃない

助け合える強たくましい仲間がいるんだ

佳作

時間とき

平田小学校5年

田井中 歩乃佳

いくらねがつても 時間はまってくれない
 どれだけまっつてといつても すぎてゆく
 友との時間 家族との時間
 もどることはできない 過去
 わたしは知っている
 青春の二文字に 月日と言う文字があること
 それはきつと 取りもどせない時間を表してい
 るのだろう
 私は思う
 時間は いろいろな 過去
 そして これからつくりだす 未来 を意味し
 ていると
 これからも 未来をつくる仕事は続く
 だからこれからつくり出す未来を
 とくべつな そして かけがえのなきものに
 したいと 私は 思う

入選

カラス

城西小学校6年

小川 朋子

いつものように
 カーカー鳴いて空を飛ぶ
 一緒に遊ぼうと思つて
 人間に近づくとギャーギャーさわがれる
 そう ぼくはみんなからの
 きらわれ者カラス
 おなかがついて
 ごみ箱で何かないかと探している
 見たことも会つたこともない人間に
 おいはらわれる
 「ちがう！ちがう！」と言おうとしても
 「カーカー」としか鳴くことができない
 そう ぼくはみんなからの
 きらわれ者カラス



入選

ぼくの夢

城南小学校5年

堀田 真瑚

いつもぼくは
 書庫の中で
 出番をまっつている
 いまかいまかとまっつている
 外のけしきをみてみたい
 だれかのお家にいつてみたい
 ああ
 はやくだれか
 来てくれないかな
 いまもぼくは
 だれかに見つけてもらうことを
 夢見て
 書庫の中でまっつている

【中学生】

特選

卒業

東中学校 3年

向井 七虹

四月から始まった この教室
あれからどれくらいの時が 過ぎたかな

部活で汗をながす きみ

試験前のどきどきした かお

先生のものまね はやったよね

恋の話にほほを染める 女の子

わははとじやれる 男の子

いつもの風景 いつもの教室

卒業したら はなればなれになるなんて

考えただけで 胸がぎゅっと

くるしくなる せつなくなる

教室に差し込む

放課後のあたたかい ひだまり

ずっと ずっと

つづいたらしいのに

あつ

シャボン玉が とんでるよ

どこまでも どこまでも

とんでゆけ……

(評)

全体に、無理のない素直な表現が、さわやかな印象を与える作品です。学校生活のさまざまな思い出から、最後のシャボン玉を登場させたことで、それぞれの未来への希望がうまく描かれています。

(彦根文芸協会 尾崎 与里子)



特選

涙

中央中学校 1年

坂田 あすか

涙はいつも空気を読んでくれない
私が泣きたくない時に

いつも目からあふれ出す

だけど 私が泣きたい時は

でてこない

どんなに泣きたくても

涙はでない

大好きな人が死んでしまった時も

涙は一雫も出なかった

本当に涙って奴は空気を読まない

でも 涙は私を救ってくれる

だから私は涙を手放せない

私達はね なんだかんたいって

涙っていうやつかい者に

悲しみや くるしみを

喜びに変えて

私達を支えてくれているんだから

ああ だから涙はやつかいなんだ

(評)

本当に涙はおもいがけないところで、急にあふれだしたりするものです。それを「涙はいつも空気を読んでくれない」という言葉につなげた作者の独特のとらえ方が楽しく、現代詩を書く上で、こういう感性はとても大切なものだと思います。

(彦根文芸協会 尾崎 与里子)

準特選

人とロボット

河瀬中学校1年

坂井 花乃

図書館司書という仕事
私はその仕事をした
でも 私が大人になるころには
きつと その仕事は
ロボットにとられてるだろう

ロボットしかない冷たい図書館
そんな図書館なんて 行きたくない
図書館は 人の温かさがあってこそ
本当の図書館だ
本は 人がいないと
意味がない

だから私は 皆に伝えたい
冷たいロボットが働く社会よりも
温かい人が働く社会の方が
ずっと ずっと 良いということ……

(評) ロボットの存在は、これからますます大きくな

ってくるでしょう。人の温もりを失くした未来
社会への警鐘を、中学生の眼からしっかり自分
の将来に結び付けて考えている、作者の知性を
頼もしく読みました。

(彦根文芸協会 尾崎 与里子)

準特選

自分

南中学校1年

三橋 力也

僕は『自分』という物語の主人公
『自分』という物語の中で
生き活きと生きている
でもただ生きている訳ではない
いつも何かを求めて
それを探しながら生きている
その探しものが何なのか
どんなものなのか

自分さえもわからない
途中で行き詰まったり
前が見えなくなる事もあるかもしれない
それでも
「いつか必ず」と信じて
果てしない『自分』という物語の中を
今日も主人公として生きている

(評) 「自我に目覚める」という言葉があります。ま

さしくそのことは、自分を外側から視る力を持
つということですが、このことを作者は「自分とい
う物語の主人公」と言い表し、これからの長い人
生を生きていく不安や期待、そして信頼を、うま
くまとめています。

(彦根文芸協会 尾崎 与里子)

佳作

サンマを焼こう

中央中学校1年

西浦 志瞳

そうだ 秋だ サンマを焼こう
サンマがあるからサンマを焼こう
そうだ 倉庫に七輪あつた
ひっぱりだしてサンマを焼こう
炭入れて
火をつけて

うちわであおいでサンマを焼こう
秋風ひゅうひゅう吹いていて
一番星も見えている
おっと皮が焼けてきた
ひっくり返してサンマを焼こう
焼けたら皿に盛りつけて
かぼすそえ
大根けずって雪にする
それじゃあ食べよう
白いご飯とほおばって
お茶碗すぐに空になる
そうだ 明日もサンマを焼こう

詩

扉

中央中学校 1年

西澤 凜香

扉とは：？
入り口 出口のことだろうか
かっこよくいうと
新しい世界の前にある
自分でひらくものだろうか
目の前にあつたら
誰でもあけるものだろうか
誰にでもひらく力があるのだろうか
多くひらいていけば楽しいものだろうか
逆に ひらくことができなければ
つまらないものだろうか

とびらってなんだろう
扉、トビラ、ドア、door：
考え尽くすほど分からない
でも——
こうやって考えていくことが
“扉をひらく”ということなのかもしれない

入選

「未来」ってありますか？

西中学校 3年

酒井 来夢

本当に「未来」ってありますか？
まず私が思ったのは「未来」って
なんですか？
今だに「未来」という存在は
ありますか？
皆さんは「未来」にはいけるけど
「過去」にはもどれない：
と言う言葉は知っていますか？
私はこの言葉を知って「なるほど！」と
思いました
でも本当に「未来」ってありますか？
「未来」ってなんですか？
私は「夢」はいつでも叶うと思っているし
私以外の皆も言葉にしている
でも「未来」と聞いて皆はどう思いますか
私はそう簡単に「未来」を言葉にだしては
いけない
だって「未来」ってありますか？と聞かれ
答えられる人はすこししか
いないと思う
答えられる人って周りにいますか？
一度聞いて見てください

「未来」ってありますか？と
言ってください
でも私は「未来」という意味を
みんなにつたえられるようにしたいな



入選

春の草原

鳥居本養護学校 中等部2年

松浦 宏晃

春の川 流れる水は自然の声
 蝶が舞う春の日に あたたかな日が差して
 大きな虫や小さな虫が自由な空をとんでいる
 一つ一つの小さいようで大きな命
 そのようすは どんな命も大切だと私達に
 示すかのように
 いきいきと元気にみちて空を舞い 草花に留ま
 る でも その一生は余りにも短い
 残酷な自然の現実 かれらがたどったあしあと
 は時とともに薄れはじめる



入選

木

中央中学校1年

宮川 あかり

木は
 大きな手をひろげ
 大きなかさとなり
 生きてるもの
 の
 親となる



入選

雨

鳥居本中学校1年

小堀 陽菜

雨にもさまざまな個性がある
 しとしとと降るやさしい性格の雨
 どしどしと降るこわい性格の雨
 大つぶの気の強い性格の雨
 小つぶの気の弱い性格の雨
 パラパラと降る悲しげな性格の雨
 ひとつひとつに個性がある
 いっしょに思えるようになにかが違う
 それを作り出すことは自由だ

私から見た人間たち

中央中学校 1年

太田 萌花

私から見た人間たちは とても忙しそうだ
私から見た人間たちは 様々なものを食べる

人間たちが変わっているのか
それとも私が変わっているのか

私は一日の半分を寝て過ごす
私はいつも竹や笹を食べる

人間たちはカラフルで
私は白黒で

人間たちから見た私はどう映っているのか
私から見た人間たちは 不思議でおもしろい



【総評】

小学生のみなさん、投稿ありがとうございます。誰れかに与えられた「題」^だ「内容」で、すぐさま詩を書こうとすると、どの人も同じような言葉や内容の表現になってしまいます。＼自分にしか書けない生き生きとした詩＼を作るためには、くらしの中でいつも自分の目や耳・手足などの体中を＼見つけ、感じとるアンテナ＼に変えて、その時、見つけたこと・感じたことをすなわな自分だけの言葉でつづってください。時には、日記を詩にして、短かい言葉で書いてみませんか。

中学生部門は、昨年の倍以上の応募、作品の内容の多彩さと充実など、嬉しい審査になりました。入賞と選外の差は大きくはなく、散文としては、生きることを深く考えている佳い作品も多くあったのですが、詩が詩であるためのリズムや感性などに惜しい点があったと思います。

(彦根文芸協会 谷口 明美)

(彦根文芸協会 尾崎 与理子)